

小林恭子の ロンドン発 グローバル随想

第43回

ロンドンの懐の深さ



イラスト・題字：長峯亜里

市営プールは最高の娯楽

高齢の家人ががん患者となり、同時にフレイル度(健康と要介護との中間の指標)が高まると、以前は気軽に出かけていた友人との外食や出張の機会が急速に減った。通院の付き添いだけでも疲れる上に、時間があっても今度は自分の体力温存を考えて、出かけることに躊躇^{ちゅうちょ}してしまう。

例外は借りている畑での野菜作りと、時折行く市営プールだ。車で15分。施設の外には何もなく、「泳ぐだけ」が目的の人々がやってくる。高齢者、障害を持つ人、さまざまな肌の色や人種背景を持つ人、家族連れ、子どもたちなど、その範囲は広い。成人用プールの隣には児童専用のプールがあり、担当スタッフが児童数人と一緒に遊んでいる。施設内のカフェは児童専用プールに隣接し、大きなガラスの窓で仕切られている。親たちはカフェに陣取り、コーヒーを飲みながらガラス越しにわが子の様子を見守っている。親の監視の下での仕事は、さぞ大変だろうと想像する。

家人は杖なしには歩けなくなったが、水中歩行は数少ない体を動かせる場の一つだ。水の中では杖はいらない。浮力が体を支えてくれる。筆者は平泳ぎでゆっくり泳ぐ。かつては小一時間ほど泳いでいたが、疲労度が深くなったので

30分に短縮し、今は20分ほどになった。それでも十分な年齢になった。

泳いだ後はカフェでコーヒーと持参の簡単なサンドイッチをつまむ。コーヒーを買うたびにスタンプをもらい、一定数たまるとカップ一杯が無料になる。高齢者割引を使うと、一人約500円となる水泳料金もうれしい。安くて体がリラックスできるレジャーである。

筆者が特に気に入っているのは、そのカジュアルさだ。予約を入れるためにメルアドなどは登録するが、いつも空いているので、当日、ふらっと行っても泳ぐことができる。高齢者割引も証明書を出す必要はなく、生年月日を自己申告するだけ。定期的に行くうちに名前を言わなくても「どうぞ」といわれるようになった。「今日のピクニック、おいしそうね」とスタッフに言葉をかけられ、こちらも「元気?」と聞く。緩いが適度に温かい関係である。

開かれた知の場

プールで泳いだ数日後、久しぶりにロンドン中心部に出かけた。病院で抗がん剤の点滴処置を受ける家人の行き帰りはウーバーで手配済みだ。名門校ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)で開かれた、2001年9月11日の米国大規模テロ後の「対テロ戦争」を問い直す